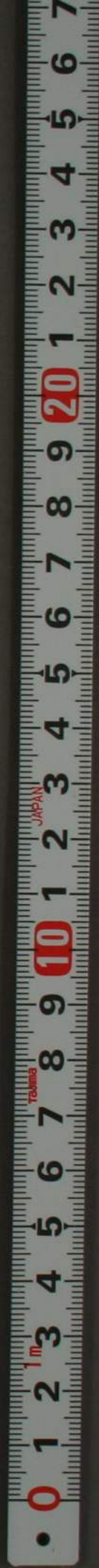
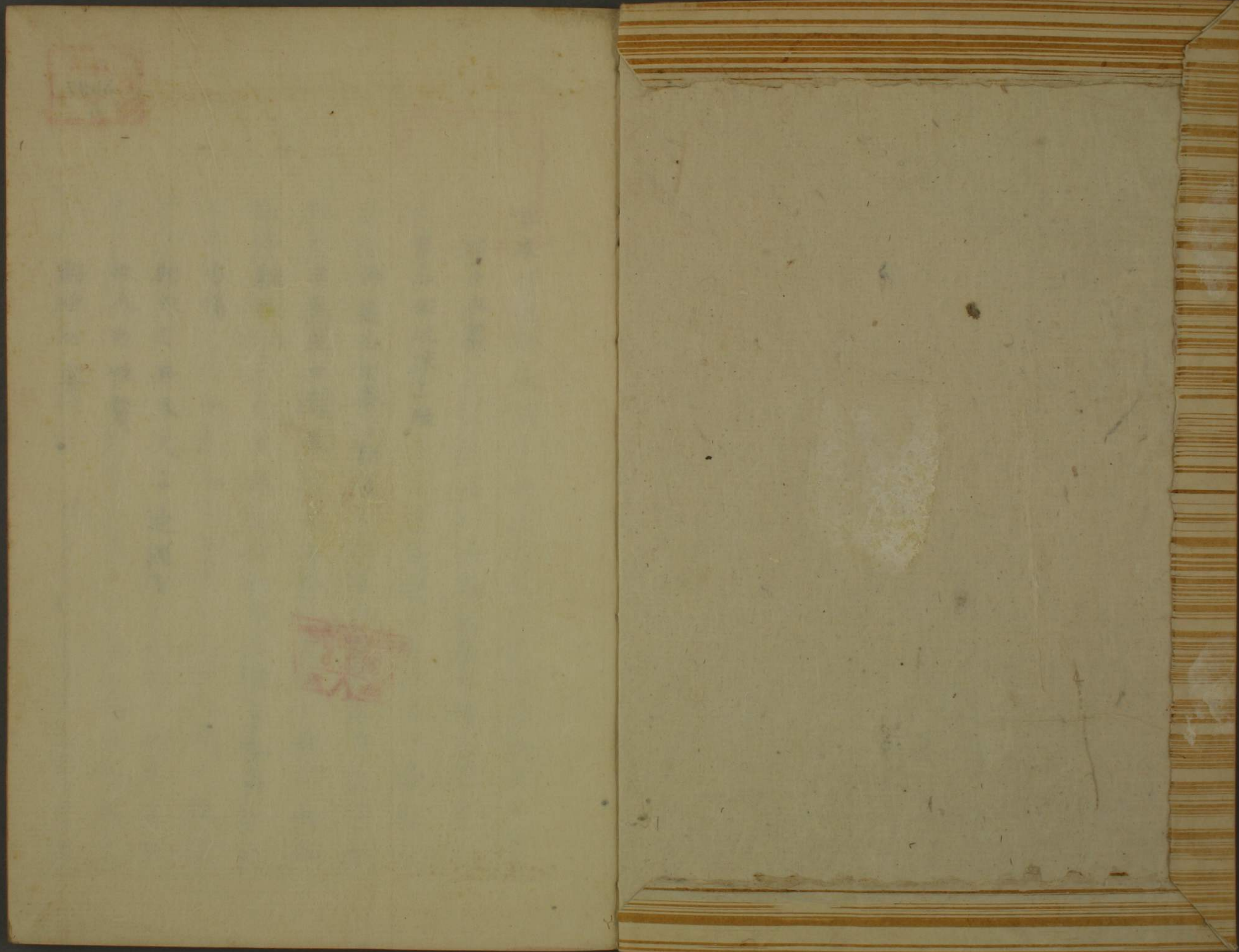




ル 2
3097
6





門 扉 2
號 3097
卷 6



日本行紀

第十五篇

第二回 琉球上陸

其那覇府と密に探る

其家屋の製造

粗状

市場

初めて日本人と逢遇を

土人の性質

船中の宴

早稲田 大塚 圖書
26.2.5
購 入 券

古城

琉球の小誌

日本より趣く

那覇港

琉球の港名

のよて艦と修補し且野菜食料及び

水舟を取るる為は八日を費し其間ハ殊小術枝

を勤めたりし〇餐然として此島の南岸畫ける

如き景色ある中其佳趣は並列せる橋梁及

ひ他の家屋多く適意の欣快清朗の彩色よして

連列せる緑林は松樹マエスノウス樹ありて

リバノニ中アの山ア下ルコと去るるときは景小齊

しくして余が學益とあるもの少からん〇土

人の異人の異様の衣裳と着し其生来の顔色を

るを寫して我等の為は殊絶の寫真と得たりハ

れと以て寫真鏡と殊は必要の品よてありし〇

此地の景況と氣候と初はハ寫真とるはは宜か

らさるし速は適宜とるまじり〇土人好で模と

るりを寫真せしめ少間の後其自像の成るるを

見て甚驚けるも亦音なりき〇此良善なる土人

他邦人と見て恐怖するおと時々おれありて又

我等の市中に出つる時ハ屢々其門戸窓牖を閉
るもあまり

終ニ其府の一部ハ我等を見て異とせ以て拒く
とのなき又至れり○予昂キ夜中舩にありて未
明より傳信機の主司其君と共に陸に至り川に
浴ふて水鳥を獵せり○此れよりて那覇府と
歩ミ回くり日没より少く後其府の裡面地の
少く高き処ニ富族の住栖あると見出せり○
市中ハ全く人あらずと雖其家屋の門戸庭園ハ閑
を以てお閑けり○これを以て此幸國ニ於てを

未々盜賊と知られしと見ゆ○新奇を好むの意益
起りて其閑ける一戸中ニ歩ミ上リ
其家多くハ市ニ向きしる方ニ廣場ありて八尺
乃至十尺の高壁これを圍めり而して其壁中ニ
一門と設ける○其家ニ浴へる平地多くハ椎樹
の籬と花壇と甚密ニ順列セリ家屋の大部ハ木
造にして甚ニ簡易なる造法あり○家ハ一個或
ハ數個の前店あり其後ニ住室ありて其間隔ハ
凡て木にして堅固をらばして隨意ニこれを挿
入し又除去し得へし而して多くの皆廣場を離

きて作まりの雨ある時は用ゆる油紙窓のこと
ハ己小前文にこれと記るるところ〇若甚熱する
ときはこれ易へて裂きしる簾と以て作れる
簾と用ふこと徹して其居住より外ふある所の
ものを見得へくして簾外よりハ其内を見るを
得ざるあり

我等未だ一物の著しきものを見聞せざると以
て此新見聞を廣めんと尚歩みて家屋に在る庭
中に至れり〇其庭の景色ハ殆ど支那の遊園
と同一くして唯これハ其住趣ありて養花の装

置あると異なりとけ〇庭の正中は盆池ありて
其周囲は蟪鼓及び諸種の養石並列して亦其水
中は金魚浮へり〇夫より甚静は家の後測小近
つき其開けし簾を窺へり〇其敷石を覆へる稿
席上は婦人三人小児二人輕被中は安眠せり〇
過ける月ニ「コニスタテンチノベ」都見格の府の此
の如き婦人は逢過せり我等皆錢貨と携へさり
しハ志々もたれり又要用はあらばして我
等々深き好新の意起れるハ實は一害ありき然
るにこれハ若此眠りする者等覺るときハ定め

て驚かん事を憂ひ且我等の好新も已に充ち足
りぬる来りしときの如く静に歸去せり實に
恐懼を知らざる我兩人の六の事と頭ハ一にて此
善良ある鳴人は知らしめざるの前ハ誰もこれ
を知覺する事あり

我等府の低処に到りし頃ハ漸く賑ひて然も
其市場ハ人相競ふて高賣せり
早賤の婦女數百人此処に豚肉鳥類野菜豆芋百
合アウモルケ三等を載せしる籠及び席の後ハ
坐せり○其一二の高婦ハ我等を見て直に逃

是其他のものハ安座せしる我等の害を人々施
すもの非るを見て其逃去しものを速に歸坐せ
り○甘「カア」スの一種ありこれ愛にて上好の物
と見ゆ○此「カア」ス四角片にして凡「カ」ム「ル」グ
地の「カア」スの大サあり且穀類にて油煮し或生
食すへし其味殊に佳なり
夫より港に起きし多の日本船あり此船ハ
此八日以来十六隻乃至二十隻入津せしあり○
此處にて始に日本の遺人ハ逢過せりこれ二カ
を其席中小荷ふを以て日本人あるを知れり○

其頭の一部を剃り残毛は蜜を掃清しまたこ
れは油ラシて頭頂まで結束を其鬚は薄けれ共
意を用ひて柳清セリ○衣服は薄き殆ど透明セ
る布の灰色及び白色の四角なる幅廣くして垂
れたる袖の附きたる長衣ふして又他の同布を
以て作る物と「スモトラニ止細のフライ」名服
の如く胸より肩に回くらく着るごとと鎧の
類せし○其二カの外は尚其帯中扇一個「ホウ
ダラア」中甚小なる頭の附きたる短かき煙
管一個小なる絹製の煙草袋一個を荷ひ手は紙

製の黒塗せる笠を携へたり○此人我等は一語
と爲さばして過ぎ去れり自然我等も亦如くな
せり○此日本の遺人の刀を我琉球小く初て見
たる兵器あり

我等夫より此日本の船は行き茶及び酒を以て
饗應せられり○總て日本の男子は少く粗
おれとも甚親和として住勝る性あり
夫より兩日と徑く写真鏡を携へて上陸し首里
琉球のよ至れり○予則ち終日土人其府の諸地
首府
は閑坐して煙を喫せるを寫して此地方の写真

を得り○予是彼秋の圖を要せしハ土人を止
めてこれを寫し又其居らざめ人を欲する地小
土人を誘き到れども土人要する地の體勢よて石
像の如く靜立し予は手を以て既小これを要せ
ざるを知らしむ時を即ち回りに其路は趣むく
此国の力役をあるものハ他邦の如く殊に賤民
の業を重し見えたり而して其教法を以てこれ
を教育し得へけん其位階の少く高き者の大
半ハ終日多くハ日影の平地小座して煙を喫し
茶及び酒を飲みて居たり○彼等ハ其食物を甚

珍らしき少なる塗筆の各異は區分せるもの
中に入きて携へたり
土人の總て其性溫柔親和よして友愛あり平々
此嶋中は滞在せるの間人を罪する事及び暴を
る役使争論等のあるを見及
弟七月廿八日コムモト上船中して琉球の主小
離別の宴をさせし○苗主ハ既よ帝命よて職を
罷られしを聞けりこれ其杖等小其城中に於
て住栖をせし事をも恵みしと以てかり○これ
事實は其説の如くなるや知らされとも予ハ唯

其國主の罷らぬて少年の聰明なる人ふれ代りたるを知返容も甚く懽喜し亀汁截肉コテマテニ漢製シタ菜蒿油蕒物漬菓實ハステイ灸音其他食膳は列せるをの皆彼等これを甘羨なりとせしと見へたり○葡萄酒ハ其意は適せさぬともこれよ及して甘「リウ」ハ彼等其味を甚羨愛せる趣に見へり○彼等此酒を多く飲みて甚懽悦し皆酔ふて其家は趣けり再回琉球は在りて予其南方に在る苗城を探り視るの間を得り○予第一は此無量なる瓦礫

の堆積せるハ其永久止みて開けざるの一あることを知きり○諸人其地は到るの路を能く予は教示しけれともこれに到るは亦容易ならざりし○予其下流の那覇は出づるの川は浴いて東へ行くこと凡三里あり○其片路ハ淡赤色の丘ふして其一部は巖石一部茂林はこれを掩へり又時としてハ下低なる稻田あり川ハ此地方を穿ちて緩流せり而して其川中ハ二個林木の繁茂せる丘島あり○此地方ハ若此遊臺状は平列せる稻田のあること無き時ハ甚くその路を

迷矢し易からんの大なる竹林中は陰見する一
二村ありて其眼を樂まぬ然るは巖石あり
て其大よして且隔立せるの状時としてハ屋壁
の残留せるものは齊しきと以て屢予を感し免
しう終ふ予は長く目的とて防ひざる舊城は
到れり

其城ハ川に曲せるを以て成れる地角ハ在て
凡三百尺の高巖上は建築せり而して其景畫け
る如く小岨立せり○其陸は續ける方ハ地漸
く平らありて三個環壁の趾尚明は之を認得

へけれとも其壁ハ大半殘破して其厚容ハ唯瓦
礫の堆積せるを以て知り得る而已ありき○川
に對せる方ハ殆ど直立せる巖面自然と堅牢を
有て尚残留せり○亦爰ハ其国の建築或あり大
き予は已に首里の新城の事と記載せる條は説
ける如く其ハスチオニ建築凡万國の人民こ
れを外方は突出して造るものな此國ハ内
方は曲入せり○第二の環壁の門の左右大半ハ
零落し其門の屋ハ亦頽破しけれとも其瓦礫推

上よ生いたる樹根こゑを保持して脱落せしめ
を極内壁中の廣地ハ悉く樹木蔓生を然れ共其
周圍の荒涼ふして一物かきに反して此よ一個
の門と存し然るも其戸ハ蜜閑せると以て予あ
まよ登り超へたり○其廣地の正中小高凡四尺
の高地あり其上長サ十尺廣十二尺の四角よ
て中凹ある石あり其石上よ支那の文字あり其
近傍の地小小机ありて其机よ香と入るへき物
の破残したるを存せり其状ハ支那人の礼拝に
用ふる物小同しからば而して門より此處よ達

て一路ありおれを以て人尚此よ到りて物と奉
し礼拝と為するらんと思へり
今琉球の小誌を左小記さん

コオコオロウケウリウキウウロキウ又ハ
聖しキユ山の島等と日本人おれを呼ひて此國日
本と支那と通して其國小宝貨と致せり故よ兩
國小預しめこゑを約して通するなり○其國を
三十六島よして又おれを別ち三とを昂子山
北中山及び山南あり
千七百十九年よ使節となりて此嶋よ来りし支

那の學士「スーボアコウニク」徐葆其往時の小吏
と著セリ此史を千八百十七年光緒に於て甲比丹名
キスウルク名英吉利の「フレガット」名の「アルセル
テ上ニ駕して探索の爲小航海せる説話中ニ記
載セリ

琉球の史ニ曰其開闢せるとき渾沌中ニ一男一
女あり此二人と「オモ、メイ、キイウ」と云○此二人
三男二女を生めり○其嫡男の名を「チーウソニ
天孫氏（天ハ小嫡男」と云ふて琉球の初生の王あり
弟二子の「彦伯の祖」とありて弟三子の後裔「庶民

とあるきり○弟三子ハ其妻を何より得たりヤ其
事ハ載セリ○第一女ハこれを天精と云弟二女
ハ此れと水精と云ふ○「チーウソ」ニ死せる後其
裔相養くること二十五世合せて一万七
千八百零二年あり○此國の算定ハ此の
年數ハ千八百十七年に其主とありたる「シュンテ
正尚貞王の時正尚貞小まで至るべし○斯の如虚誕な
る史を此國人ハ必要の者とセリ○我等の時算
ハ此れハ此島ハ凡開基六百年代ニせし知れし
あり其頃支那の「ヨシグ子」煬帝此土人ニ貢

まると命せしう土人其命と拒みたり
支那の「アモイ」厦門「ホウキ」福を以て隊船を
装ひこれ小兵卒一万人を載せて琉球に至りて
上陸し野戦小勝利を得其首府と焼き土人五千
人を捕へてこゝを支那に曳送れり

千二百九十一年ふ於て別なる支那の「トソ」

世祖といへる帝「ホウキ」此島を遣さん々為

し二隊船と装ひしう遂に臺灣に至りて歸れり

○其後千三百七十二年ふ於て「ボングオウ」共武

帝琉球の「ツオウ」地に鎮をる「トライトウ」侯の

詩に有司ハ遣セリある此時國民の乱に因りて
三小部に分せけれあり○此有司其使命を辱
め此島中の官人と携へて支那に歸り其事を
述へたり○琉球の使節と支那にて善く礼過し
多くの貨物と与へて歸らめたり○あれを見
て其他の二王「カン」バ及び「カン」ウも共小支那
帝に服従せり○支那の王族三十人其頃「カホウ」
りと云て今の那覇ある地に移注し爰に支那の
書學書冊及び孔子の學と送れり○琉球の貴
族の子弟を南京に招きて支那の國費と以て出

北と育教でり
カウハシ王在位の時諸島と合せて王領と
セしより後永くこれを統一せり○此國亦支那
及び日本に通して其兩國と有益の互市をなせ
り○日本の有名なる帝タイコソと太閤琉球の
君カングニングは命して全く日本に服従せし
めんとい然るは其命と拒たり○爰小於て日本
人一隊船と遣りて上陸し國王と日本へ曳送せ
し國王日本は行き其貴き卓量と以て凱歸せ
る人を驚かしめを以てついで其國小送り歸

されり

近時に至り韃靼王支那帝となりたるとき此國
より支那に致す貨物少少變革あり且爾後此國
の使節ハ二年毎に一度北京に至るべきと定め
たり○カニク康熙王此改革とせしを以て
今小至るまで此國中其名と稱揚せり

○大約十年以來僧侶佛教を此國に移し來り今
世小至る迄連續して流行するあり○此國小在
る我獨り佛教の世は用ひらるゝ其様を察する
機會と得たり然といへとも又思ふは當時の國

民多くハ偽飾あき自然の世教は従て朝暮と送
るト見へたり其故ハ如何といふ小堂塔詞字半
傾頽し舊時の佛像或ハ廢墜し又ハ意ありて毀
損せるものあり毀銷して未タ久からざる其跡
のあらハれし処ありき○「ボレガミ」男女雜ハ制
誓の義
度の外はあり然りと雖世人之と行ふ者稀あり
○國王の妃嬪ハ国は三家の公族ありて其中よ
り唯一人を擇んで夫人と立る事と得るあり○
三家の外ハ公族の甚聲勢あるあり然りと雖國
妃と此家より擇を肯ては如何とるれハ此家の

血脉國統小同しきや否や分明あらざる故なり
○公侯權貴の位階ハ世守をへし然り而して司
職の人士も高位と登る事と得るあり○公家一
歳の費用并は百司の賜俸半ハ府庫有るハ此の
貨幣と資し半ハ諸租ととる則塩銅錫硫黃及ハ
凡商の物貨等あり

此書の内は尚一話の記載をへき事あり夫ハ國
喪の時の大札と新主踐祚と於ての曲礼あり此
ハ心付へき事件あるから切要軍務と非ずとして
筆と省く

此海寫の名号各樂地に於て稱ふる処殆んど同
くからん其之を書とるは何か最是なりや下文
小明をり〇漢人此簇島とリウキウと名付く英
國の圖上はハコヨコヨと稱す或ハ復リウキウ
と名付く千八百十七年を於て此島嶼と搜索し
たる甲比丹ハルル人ハコウケウと名付く佛國
の地圖ハ又リウキウと稱せし
明朝を以て再び海小浮緊要の地和戦を決する
の處日本地方に往ん

日本行紀

第十六篇

江戸港に於て第一の事業

日本の海岸

其地の華麗ある事

港内に進み入る事

浦賀港

日本人と第一の相見

日本人の外貌及び衣服海上に在て預備

乃定則

港内は於て測量

岸上の砦壘

敵方の防禦

第七月第二日と以て「シュスグバン」シ「ミススピ」ルカヲトカ及ヒ「プレイモウ」ル共ノと共ニ琉球國那覇の港と出帆しり後其弟八日と以てハにくぬさる様日本の境界中小至らむと思ひしとレ此故小其日の黎明を以て既小甲板上小立出さり○時小農霧海上小四垂し朝日漸々行道

昇る○「シュスグ」ハ「サラトカ」ハ曳きて前進し「ミススピ」ハ「プレイモウ」上小曳れて後に續きたり○或ハ日本の海岸は出逢たり然らレら此舟我を見るや否や一條の生路と求めて逃け去りたり○此海船の大サハ八十トニ廣狭と度より百トンを量るへし甚とよく製造ル器名ノしてあり而して通例の綿布の甚と大なる帆と掛く時はより又其の小さき帆と各檣上ニ掛る事あり一ハ舳上小掛一ハ艦上ニ立て而して恰も好く帆と使へり○此船ハ漢人琉球人のく

班らよ色くる事とあさひ只單よ木色ふ染あせり而して薄き銅の飾りありて海水の爲よ緑色ふ変せり。

大九第六時頃小嶋岬の簇一問よて江戸港の浦賀以内全港南西小當る地よ来れり第九時頃海霧と踰て日本の山嶺を見よ一恰其時よ於て号令と下を其令ハ合戦の用意せよと此あり此軍備を成を爲小多の時と費を其故ハ每砲中よある舊き装薬と引出し新小勢力強き薬袋と籠りえる事の外ハ却て軍艦の舷側よ於て万事悉具

伎一端をく戦を初るとも差障るく備へあせむなり

響小見一所の諸山ハ画き一如き形勢に一峻峻ある石壁と以て海岸の方向よ隨ひるされ下至てあり一〇山頭ハ多分樹木繁茂たり然一なるから傾斜の餘り峻峻をらさる所又よ山あからも平坦なる處彼是よありて肥沃の原野をなせよ〇第十時頃我よ近き諸山其高き事六十「フー」尺のより七「フー」止もあるへき此諸山の嶺頭と傑出トさる富士山といふ大なる火山の峯

頭あらハ丸さり此山ハ能く三十里より四十里
の遠方小も見也へき山あり○山ハ杖の居一所
より百里餘も遠クありといふ事と其後ハ知
る○此山の形も諸の火山の如く切に離しと
る氷柱形あり○此山ハ少しく白き筋條あると
見たり然しあから霧のとき零圍速るを以て雪
あるや或ハ白砂あるると認得たり

第十二時頃江戸港の最前なる港口に來たり○
小高き岡阜ともいふへき土地の後方小高山の峙
つあり○阜岡の形勢如く小於て画一貌の岩

石暗礁とあつて走り其上ハ姿意ハ茂生したる
草又美景ハ繁植しとる小柘或ハ喬松と帶たり
○此阜岡の未陸地小於てハ狭き平地とあり又
曠野とあり其内ハ於て多く市驛村落と見る○
漸く開作して田畝とあへき地小於てハ佳好
なる綠色一體の水田と見る其間ハ石塊小林
ありて好風景と呈露セリ○此國土の快爽ハ温
和にして灰白色なる騰氣の覆ひ廣り蘆州を感
壓して淨静あらむるよよきり海水の暗緑を
るも近岸の処ハ於てハ氣小映して甚く美好の

景色とあせり

我々船漸々海岸に近づくのと無数の海船又
増々多し而して港口は駕入せし以来譬へ此
海船と其地数ふへからざる許多の小獵船と以
て海水と掩ふともいふへし初は其船隻我
に心付て避きたるし然しをから或つの小獵船
十分は速は避け走り得ざる者ありて近く我々
船は先立て擗き走る時或一人帆の助も借らば
尚又風は逆ふて走り入る異しむへき此海船に
心を止め如何して此の如くあると驚と起さく

るものありと云ふなり○第四時の頃船至る
処は港の廣さ或は三十里より四十里あり或は
十里より十二里の廣さは過ぎぬ○此処は内港
の入り口にして其奥は尚三十里より三十五里
追達をへし其奥底は江産あり

此海岸の西側は計出せし処ありて大なる都會
あり其地小丘の斜垣なる処にして幾多の小丘
上砲臺と築成せり○我船尚此地陸より三里遠
く至てありし時一の砲臺より高く号砲と昇せ
り然しをから我々儕の預め測し如く一彈丸

の海中小落る事なく只其砲臺の直上と於て空
彈或ハ号火の破裂を有るあり○此故に既小見し
所の放砲ハ号砲として三回累發するの後他の
遠く隔里一丘上と於て之小應せしあり
此事件と顧ミを遠船を進め直に墨堤より一里
半の処に錨と下を為し来り就中戦隊の序列は
於て繫泊せり○直に見る幾多の大なる海船陸
地と離れて漕き来る各船艦数或ハ六挺或ハ八
挺水夫十二人或ハ十八人の力と以て撈き進む
其艦と使用する小前より後の方を操り漢人

のとく船の舷の方を向控せしる躰勢にて艣を
使用を凡そ魚の尾と動し簪と使ふ小似しり○
此船中は鎮府の一官吏あり尖ハ我船舷に來る
事を願ふ者なり○暫時應答の後は位階最高き
官吏其國の和蘭通事を以て船上に來る事と許
せり然るは此前の吏人の其鎮府の重官はあら
さざりしと以て第一の可イテナン止館と應答す
べくありし○此官吏總の説話にて我從船來せ
し因由を糾し且府尹屬官中の首官一人船舷に
來るべき間之を望み請ふの願と兼て説話せり

○此往復の間小幾多の海船尚敷を増し往年我
る國の船到岸せし時の如く我ら船を周回く圍
繞せんを企しと見えしなり○コムモド名官
人として此人は言しむるは貴方の海船我を遠
ざらるへし如何といふは其我を接待するの法
海上の規則は逆ふ而して其故は我ら徒之は恩
耐える能はざるへし○彼官吏此告を聞て甚不
平と抱きしと見ゆ然しなから聲色を厲ふして
前條の事と再三頼みし時は彼人之を諾したり
然しなから第一は我徒一人と放つて海岸に來



らしむるあかぬといふ頼みて諸船と退いたり
如何とされし此退船の吏は彼人は取りて困難
あるへ死應答は當れはなし○此退船の事免さ
さ而志す之に由て氣色穏ふありしは彼官吏
國地の方を歸り去り
次日黎明鎮府屬隊の頭官市尹は類する者と伴
ひ船舷に來りし○此官人は位階高しとて司
旗の甲比丹館之と接應せり此甲比丹彼の官人
はコムモド名官の來岸せし所以と告知らし爾
時は説言ふ軍艦江戸の港迄進み上るへく其地

よ於て亜墨利加政府よりの贈贖と高貴の大官
に手付から渡へし〇両官人此事は就て故障と
顕さむと欲したるしう去りるから其時は故障
の上は思ひ得さりけぬハ彼の筆書札と作りて
江戸に贈る為ふ四箇日の猶豫と請へり此書札
ハ舟と以て贈るは彼の徒方今の定めは第十二
日の午時迄と用也此間止り居るへしと其期を
遠く積りしなり

此回答と待付る間此國人の様子と已細よ心付
て見し至し〇頭貴の位階は立つ諸人ふ於てハ

亜細亞の習風ある事と臨て疑懼する色と其顔
色の上は於て終は見出したり然のミならは獵
師水夫卑賤の輩は於ても此疑懼の色の甚顯著
あるハあらさ至し〇考の上は浮む一二の事件
あり軀の腰より以下の部と腰より上とのり糸
合ふ於て下の方稍短く見ゆるるり腰より上の
長ハ尚目は付くと思はる此國の人ハ帯と甚小
低くする由て然るあり〇衣服の製ハ大方琉
球は於て嘗て日本海船の舷上は立し人を見し
処は同一し至し衣服の幅廣くカフタン幅廣く
製せし

表衣の仕立方は似て幅廣く垂れかゝる袖
の付け細の下の方にて縫合せてありし腰の周
圍は帯としめ其間ふ一は甚長くして諸手にて
遣ふへき釵と一は夫より短き釵とあり去りな
から此帯方は於て考れハ其主の爲ハ甚重く
して荷よある事と見へし如何とあるハ彼
人断へを佩刀と彼の方を是の方ををりやると以
てあり○襦袢ハ其品輕羅の物あり素色の短き
子ニカ白き毛織の襦袢より仕立をあり同
しき袴其長ハ豆の踝迄届へく此より下の黒き

品より作るし莫大小をり而して別々小大ある
指と備へし下鉢の裝飾リ此小て全一の鞆ハ
藁にて作りたる大指と他の指との間と通し藁
にて編みし兩の美ある帯あり豆脊と踏て履の
左側と右側の方を至る○頭ハ大分禿は剃落し
あり餘し止る所の髪ハ頭頂の上は短き尾の少
き迄は編みてあり此抄を額の上部の処は滑
すて置しりの頭髮ハ細き綱のまぐ櫛つる而し
て油つけてありし此上掩の部ハ多くの注意
と費ししりの鬘鬚ある者と見さるし又頭上に

物を戴きし官人を見請ふ事あり人々唯摺扇と
所持したり之を以て日光と遮るる用ひし〇士
官の者ハ大なる笠を冠りたり此笠ハ甚く扁平
よして勝れて羨しく漆ぬりてありし〇高貴の
官人ハ皆黒き表衣を着せし其表衣ハ肩と
脊と乳の上ハ縫除よかひて紋も同じき飾りあ
り色付けしる絹と以て繡してありし〇貴官の
人ハ又笠の表も小サキ斑の類を画きてあり
或ハ金紋せしもあり〇水夫ハ皆力強く強健を
る男の子ふてありし腰の周囲は木綿布の一行を

除の外都て裸躰にてあり去るから狹く船小近
付時ハ短くき衣を着たりたりその衣ハ各属する
處種々の船号の度に従ふあり〇素針者も常々
船の後方よ立ちし其人の左右よ二の幟を懸し
たり一幟ハ其自己の記章を標し他の一幟を白
き兩條の筋の間よ黒き一條ハ筋ある者なり〇
其後よ聞し此黑白三條の筋ある幟ハ國帝の制
色ありし
我徒江戸の港内よ在る其間ハある程の手配ハ
用意したり日本よりの襲撃よ向て竊小備る為

ありの許多の番卒を三倍に増し尚且晝間の頭
官四人船上各処に看守とあり二時毎に相文番
せり○夜の間は各船舶用手銃弾刀の届く距離
まで繫泊し而して号令を定めしり其令は海岸
或は海上小ても非常の舉動の徴少くても有と
直小アルラムの鼓曲名を搦撃せしりとあり○後令
杖々徒の休息を妨げぬといふとも預思の手配
切に信誠ありし日本海にての襲撃は往昔よ
り然るに由てあり殊に甲比丹ゴロウニ二人の
の前例もあるに由て此人の聰敏の船將るに

り日本の襲撃に依て其配下の者と共捕へら
せ一兩年間囚とありし
初昏に及むて岸上は非常の看場と發起せり○
悉の丘山上大なる号の篝火を焚き起せり所々
の墨砦砲臺の上も亦守夜の篝火と焚つけしり
沿岸及び山間の村落も火を焼き炬火を照して
往返し乱まざる螢火に似たり
第九時を及んで旗章船の上は尋常なる初夜の
放砲を為したり他の船上にて之に應じて放發
せし時瀕海の地俄に擾乱を見るに幾多

の人庶炬火と照して彼是は奔走し或処の守夜の火は消しさり此は由て見れは吾徒襲撃を企ん為は夜間番兵を立たると日本人を考よりしあり少間を経るの後拳岸船寂寞として唯時を報する大鐘の響の明は幽は海を渡りて聞ゆるの外何事とも覺さりし碇泊の為は繫王し浦賀といふ都會に現住の人家計るは八千より一万軒計もあるへし而して江戸の為は搬入港の類する見るへし如何といふは江戸より来王し海船は江戸に至るへき

々ハ最初は此地は導るれはあり○日々は此を走り込大なる海船の数をたしうは百隻より下らさるへし其故は日本大小の侯伯周歲の一分を江戸に於て暮し其間悉の藏貯する者已り為又家族の為其領する國より搬運する事と考れハ其理明は然るなり

日本人は許せし三日の約を港中の海水を測量する為は費せし○此間棧ハ「ミスシスピ」船のコイテナニ止名館を勤めし「ベント」船のは屬せし軍船の内はありし此人は兼て器械の監督も命せ

らまでありて○港中の深淺と処々測量せし後
は幾多の砲臺の装置及び砲角と看視せむ為小
岸近く乗り廻したり○海濱は近く繫王し番舩
の我徒の遠く江戸は上らんと思ひけん幾度
う妨んと擬せし様子と認たり○此の如き時節
小於てハ暴劇を以て應をへく兼て命せらるる
里○我々各箇の船隻ハ十六人を以て乗り組
諸人手銃短銃刀剣を用意せし○オヒシレニ官
ハ精巧な工める短銃を用意したり此銃ハ六回
墨叢の間は装薬する事なく打撃をへき物なり

旋轉銃と名付て龍動英國の都名府の市店まで流く
流行するを見し○日本舩我々行く先を妨くへ
く企し否や乗組の一半ハ楫を棄て而して居板
下の手銃を引出したり○此態勢の顯しと以自
由の道を開く為小常は十分あるあり○我々見
しりし所々の砲臺ハ只土より築建てありし千
六百年代七百年代は於て用する仕方わて半規
形又長方形は作里てありし此装置はてハ自
然は十字火と行ひ難し○臺場の旁側及び砲臺
方後方ある山丘ともは防くる甚し不都合あり

て全く防禦あり難く攻者も於てハ勞苦なく乘
取得へきあり○三里の沿岸の上各種の砲臺
於て百二十門より百三十門の硫砲の爲に設く
銃眼を数あり其内銃砲の備ありハ漸く四分の
一あり而して備へる砲類も九封度より十二封度
あり杖徒風波の模様思き時ハ此臺場よりの彈
勢達せざる外も於て碇泊し而して此臺場を杖
六十八封度の砲を以て容易に打壊せしむ故を
至○我々徒の最危懼をへき敵手ハ如何の機會
も於て船隻を思れたりし船ハ製造も慥よて且

日本人の敏捷あると適當なる法を以て指揮セ
し故あり又筋力遅しき土人の白刃を以ての戦
も於てハ不容易の敵手あるへし○第十一日内
海の浅深を測量せんともるも我等々艦も害あ
ららんやうふまづ「ミスシスピ」名艦を中へ漕出
せたり○我輩の滞泊せる所の浦賀海中よてハ
岸も出崎あるを以て陸地の形容を見るも能ハ
る此の出崎ハ堅固な臺場と築造して有り○此
月^{十一}「ミスシスピ」名艦も乗組居るも依て遙
く内海の晝頃迄を量知せるを得たり○ア

カ、ト名船及ひ其他の艦をして岬崎観音崎といふ
と傳送せし時海岸各処より凡百廿艘ハ、リの
船を出せり其一艘ハ廿五人又ハ廿五人はとも
乗組するハ我艦と此所前の観音崎にて障防セ
んと欲と見へたり又右は相對しする海岸按す
富はもとを云ふらん次の條よのよ同し程
西方と又えとまハ方といふなり
ある船数人数にて浮へり此ハ其西方よある船
と接合する為と見えり○我四艘の大艦ハ
レカ、ト名船より其間凡一里の四分一を隔て四艘
一線となりて進めり其艦一艦毎一人づシ

井ブロード深淺測量を以て測量するハ我乗
組する艦のミハ四人にて為せり

斯のミク検査と為さ事ハ海中暗礁暗洲等有る
船路危しといふ風説高けれハありそハ未其地
と遇ハさぬハ風説とあるハち虚妄ともあるハ雜
けれハかり○刺の如くミして少し障りなく進
六と凡十二里ハミあり其内た、一度日本船
戦と為むとある形容とありたれとも我々アレ
カ、ト名船ハ支りなく進ミ行けり己ハ我艦日本船
を走り越え按すの先ハたちて我国の船同し

く走り込たりまで進みたる時蒸氣笛歸令の
と見えたり此ハ測量全く為し果しる
を以て合圖とあり此ハ測量全く為し果しる
の知らせありこの巖しき音と幾もるや否や速
に艦を反して乗還したり

此処は達る時艦を進めしる止遠は内海の晝頃

は大なる都街と見しり其方位を以て考れハ艦

は江戸をらびして外ふハあらしとおかゆ然れ

と「コムモド」の官名の命令嚴酷なれハ其近

は進て具は檢認する事と得たり

コムモドと屢使と受の後日本國帝王は江戸の
官府を

をへし合衆國大統領よりの書簡と受取のため
十二日江戸より西人の領事官参着しへきよ
の知らせと得しり其應接の所ハ浦賀より路程
二里はかり隔りたる小街衢にして栗濱と称を
る処あり其処ハ既は「コムモド」は應接をへき
為の小屋と營造られしり

